

白く、眼涼しき、桃われに紅と根掛したる少女。
「オヤ！お須江ちやん、お姉様お宅……」
隔てなく、打笑みて云ふを。

「はい、エ……」と彼方は奥の方見かへりつ、また「何か御用なら私同つて置きますは。」と常に似もやらず切口上。

そよとの御音信だになさきは、萬一……御病氣にはあらずや。などいとしく、心にかゝるまゝ、わざと音訪れしものを……清江は言ひ知れず、口惜しく、

「イ、エ、別に用ぢやないんですけれど、御門を通りますから鳥渡……」思はず斯く云ひて、ためらふ。「左様ですか。姉さんは駿河臺の華族さんの許へ、お嫁に参りましたの。若し彼地へ行らしたつたら、何卒お寄り下さいまし。」と又も冷やかに。

「まあお嫁に……」われと我耳疑ふ如く、忙しう問ひ返したる清江、渾身の血汐も湧くらむやう覺えぬ。あゝそは眞ならむか。今の今まで堅く信じたりし花代様、やがては兄の……實に君を義姉君と呼ばなむ、身の幸多き事よ。とくりかへし、もをも敷や幾度。そも今は仇となりて……。
あるにても心羨しうおはしし、花代様、高き爵位、光

榮ある位地に、心奪はれ眼くらめき給ひしか。
實に我が兄君も、貧しき少尉ならて、さるきはならましかは……。されど……世の人はあれ、彼の君のみはよも……と思ひたりしを。

實に頼み難きは人の心よ。いとせめて、妾は友一人失ひしと諦めむも、やがて凱旋ます兄君を……
あゝ情なきは花代様、餘りなるは花代様、恨めしきは花代様、君は妾のみかは、兄の心をも殺し給ふか。

「御序の節何卒よろしく……左様なら……」
さすがに、さわぐ胸をし沈め、聲震はして云ひつ。踵を返す折柄、ふと目につきしは、半ば開かれし、枝折戸に添へる袖垣に、色美はしき紫陽花の一本。

作者は紫陽花の花の色うつり易きをそれとなくにはばす爲に、結末の一句を加へたやうであるが、之れは必ずしも重きを爲さなかつた。矢張おもしろみは全篇にわたつた應對より、突墜に起るお須江の胸中の疑惑、失望を描す處にある。(選者評)

倉座敷

岩代 服部 水仙子

(一)

雨垂れの音も絶え……て桐の大葉を渡る風サラサ……。世はまた秋となりて、今日も亦霧の雨窓を打つ。

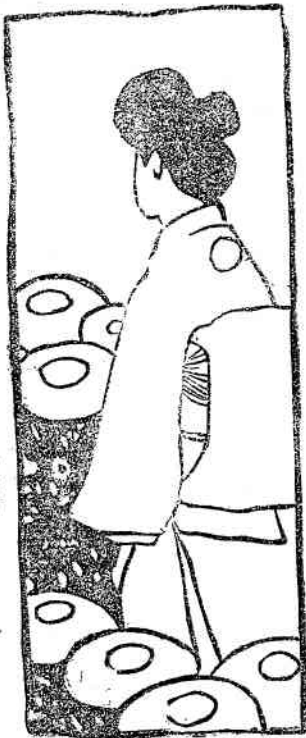
「竹や早く此のお薬を倉座敷に持つてお出で」
茶の間に響く義母の聲に千代子は我知らず足を踏み入れたのである。

(二)

天井の低い小ぢんまりとはして居れど幽静なれば幽静なるだけ微かな物音も心に響く、風通し宜からぬ倉座敷、十畳敷きの其丸窓の許に千代子が寢臺は据へられたのである。床の間の薄墨繪の掛軸稍々古く一輪差の白ばら清いけれど寂しい。薬の香は早くも室に満ちて昔を思ひ起す、亡き母の病當時、さては姉が最後の微笑み顔

(選外)

神田 ぶみ 子



は誰が目にも。
座敷の時計二時を打つて、忙がしそらな絹ずれの音、よろしくする身を、乳母に助けられて静々と廊下へ、月は開けられて、我を待つ薄黒暗、ハラハラと散紅葉の二葉舞ひ込んだ。

「あゝ乳母や私も此處で死ぬのだよ」
その艶のない顔に光る露の一角、豊かな乳母の胸に何と染み入つたてであるう。

「何とお仰言いますお嬢様」
しつかと抱いた千代子の體、之がまあ二年前まで、あの福々としてたお嬢様であるうか、いたくしい此瘦せかた、如何してお大切なこのお病人をこんな陰氣な處に入れられようぞ、奥様もあんまりな！

あゝ母様はこゝで死んだのだ。姉様もこゝで眠りなすつたのだ。遠からず私もこゝで……そう思へば懐かしい、いつそ早く母様や姉様の傍に行きたいもの親子三人同じ病氣で同じこの倉座敷で果てるとは、今此座敷に押込めて寄りもつかず。あゝ恐るゝは尤もな

牛乳沸すべく乳母は臺所へいつた。
千代子は、凹みたる目を微かに見開いて見やるともな
く見つむる窓の障子、バサリ桐の一葉の散る影うつつ
た。

「姉様！」
戸口の方に微かな人の氣配、
「姉様は入つてもよくつて」
千代子はふと耳傾けて居たがやがてまた、
「姉様！は入つてもいいの」
「松ちやんなのア、おはいり」
静かに戸を開けて現はれた髪をお下げにした、今年
十三の異姉妹。

「姉様こんなとこ淋しいでせう、何故こんなとこに轉つたの、病氣には悪くないの？今あたしね學校から歸つたとこのよ、あたしすぐに來ようと思つたらね、あのう母様がね母様が……」
「まあよく來て呉れたのねえ、母様はいつちやいけないつて仰言たんでせう？ね、それでも松ちやん來て呉れたの、ほんとは乳母やと松ちやんばかりなのね、親切にして呉れるのは……私死んでも忘れないうことよ」

「え、姉様死ぬなんて……」
ぱつちりとした目を見張つてさもく驚いた様の可愛さ、千代子はつと其手を取つて、
「オ、御免なさいよ松ちやん、でもねえ姉様はもう……もう……」
サツと一陣の風外面に荒れて、と思ふと
「松ちやんは何です！私があれば云つたのに……千代さんの病氣に悪るいでないか、さア早く彼方において！」
自慢の金齒ちらりと初子の姿、
「でも母様……」
「い、から早くあいてよ」
千代子の傍に居る松子を無理に引放せうとするを、
「あ、母様どうぞ……」
と立ち起ろうとした刹那、俄にこみあげて白布を染た唐紅！
「さア松子、早く彼方において……い、え聞かないか危険いからさアいくんですよ」
と己も共に走り出て、たゞ「乳母や！乳母や！」
雨のさゝやき。落葉の響。聞は何者かを呑まんとして襲ひ來た。

森の人

松尾 弔歌

(選外)

美濃 杉山敏子

對話も地の文も手に入つたもので、殆んど申分ない、只趣考の上にて、之と云ふ取りどころがないのは、又巴むを得ない。(選者評)

今しも沈む夕陽の餘光が直紅、淡紅、オレンジ色と西の空を茫乎と末ひろがり、ぼかして、猩紅色の浮雲がふわり、鮮かにくつきりと輪畫を取た長谷布引の山麓には夕餉の煙が縷の様に並びいて居る。姫松原の林頭、歸鴉二羽淋しう鳴ひて時に急ぐ。綾川橋を渡つて秋の草花の咲き満ちた徑路を二丁計り二重池を回つた自分は聽て愛宕の森に入つた。



下ると又現はれた二重池、其岸を右に暫く歩くと紅葉の木が空を覆つた少し廣い所があつて大きな石が二つ自分は其一つに腰を据えた、と思出した様に岸邊の葦の中から鳴が二羽飛出した。物音が絶えて又元の冷靜さに返ると自分は邊りをきよとくくと見回したが何も居ない、ふと其處の石に例の絹子が腰を下して居る様に見えたので、「あッ絹さんッ」と、すがらうとしてはつと驚くと夢？幻！誰も居ない、と其れに氣付くと又例の悲しい思ひがむら／＼と湧いて來て、自分は重い胸の深傷に又もや自から、なやまうとする。首を俛れ

愛宕の森！其れは極く冷靜かて神々しい所、仰げは黄葉した木々の梢が美しい空に彩織りなして、横なる林の中には落葉がうづ高く堆積つて居る。耳を澄ますと向ふの杉の木頂きに鶉の鳴く聲がする。楷段を登つて御社に禮拜了つて、左にだら／＼坂を

て深い沈思に耽つた。
然うだ自分は悲哀な人の中に指を折られる一人だ、五歳の時に母に分れて又十七歳の時には一人の父にも別れた、其れからは彼伯父の手一つに漸く高等學校の門に入つて一年、今年の夏病を得て此故郷の地に歸つた